

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

とうしょけんぶんしつ
島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 22

2026年3月

小湊の港の波は
小波のみ
南の波も
水面揉むのみ



| | |
|--------------------------------|--------|
| 研究紹介 | p2-7 |
| 奄美大島における森林のモニタリング | 鶴川 信 |
| 奄美群島におけるミドリイシ属サンゴの繁殖戦略と種多様性の解明 | 北之坊 誠也 |
| 文献からたどるケナガネズミの和名の移り変わり | 菊池 隼人 |
| 分室活動報告 | p8-11 |
| 学生島体験! | p12 |
| モニタリング調査と奄美の食 | 吉田 早希 |

研究紹介①

奄美大島における森林のモニタリング

鵜川 信

(鹿児島大学農学部)

奄美大島と徳之島には、アマミノクロウサギをはじめ、多くの固有種が生息しています。これらの固有種の存在が「顕著な普遍的価値(OUV: Outstanding Universal Value)」として認められ、両島は、沖縄島北部、西表島と合わせて、2021年7月にユネスコ(UNESCO)の世界自然遺産に登録されました。これを受けて、環境省、鹿児島県、奄美大島5市町村、徳之島3町、そして、NPO団体を含む地域の方々を中心に、包括的な管理計画が策定され、固有種をはじめとした自然環境の保全が進められています。

包括的管理計画の中で注目すべきは「順応的な保全管理体制」です。「順応的」とは、環境変動や社会情勢の変化など随時変化する状況に応じて、保全管理体制を柔軟に変えることを示しています。環境変動としては、気候変動や侵略的外来種の侵入・増殖が挙げられます。また、社会情勢の変化では、観光客の増加による自然環境(観光資源)のオーバーユースが想定されます。これらの状況を捉えて、順応的に保全管理体制を組み直すことが、顕著な普遍的価値である固有種の保全に極めて重要な一手になります。一方で、この順応的な保全管理体制を実現するためには、状況の変化を随時捉える“モニタリ

ング”の存在が必要不可欠です。

順応的な保全管理に資するため、鹿児島大学では、奄美大島の世界遺産地域にて、植物、動物、無機環境のモニタリングを実施しています。このプロジェクトでは、参画する研究者が陸域と海域の2つのチームに分かれ、前者のチームは、森林における植物と動物をモニタリングしています。後者のチームは、奄美大島役勝川におけるリュウキュウアユ個体群と水質のモニタリングを行っています。森林のモニタリングでは、奄美大島中央部の天然林(常



毎木調査の様子

緑広葉樹二次林)に34カ所の定点プロットを設置し、樹木群落、哺乳類、鳥類、昆虫類を定期的に観察しています。

これらのモニタリング対象の中で、樹木群落は、他の生物に生息空間と餌資源を提供する存在であり、その保全が固有種の存続に欠かせません。そのため、樹木群落の観測データは、基礎的かつ重要な位置付けであり、5年ごとに個々の樹木のデータを収集する「毎木調査」を実施しています。モニタリングのスタートは2021年であり、そこから3年をかけて、調査区の設置と第一期の毎木調査を実施しました。調査区の設置では、様々な種類の森林をモニタリングできるように、異なる地形(尾根と谷)に位置する林齢(森林の年齢)の異なる34の森林に調査区を設置しました。これらの調査区で実施した毎木調査のデータでは、尾根の森林では、林齢が上がるにつれて、樹木の種多様性が増加する一方、谷の森林では、種多様性がほとん

ど変化しないことが明らかになりました。これらの成果は、国際誌 *Journal of Forest Research* にて公表されておりますので (Ugawa et al., 2025. *J. For. Res.* 30: 429–438)、ご参考ください。

樹木群落のモニタリングは、2025年度より第二期を迎え、調査チームの連携により、2025年12月までにデータの収集がほぼ完了しました。現在は、これらのデータを集計・整理しているところです。これらのデータを第一期のデータと合わせて解析することにより、奄美大島における天然林の動態を捉えることができます。第一期の調査時から、森林の構造や種組成が変化しているのか、解析によって明らかになると思います。毎木調査を2030年、2035年と5年間隔で継続することで、保全管理の順応性を確保すると同時に、森林の動態とそこに生息する哺乳類や鳥類の関連を明らかにできることが期待されます。

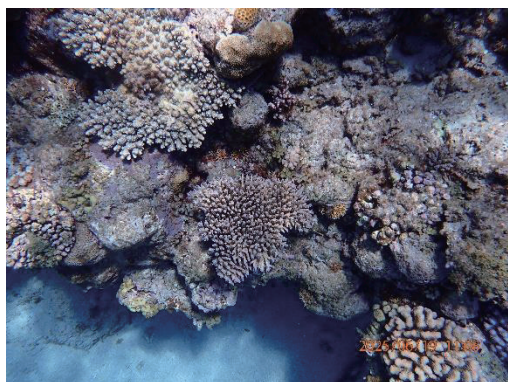


森林に覆われた奄美大島

研究紹介②

奄美群島におけるミドリイシ属サンゴの繁殖戦略と種多様性の解明に向けて 北之坊 誠也 (島嶼研奄美分室)

奄美群島の海域には多様な形態や生態をもつサンゴが分布しており、なかでもミドリイシ属サンゴはサンゴ礁を形成する主要な構成種として重要な役割を担っています。

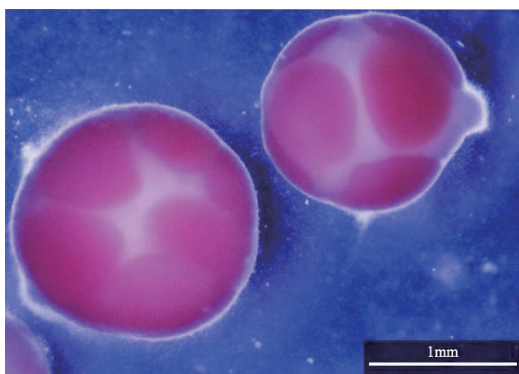


サンゴ礁を形成するミドリイシ属サンゴ

ミドリイシ属サンゴの成熟群体は岩盤などの基質に固着して生活しており、一度定着すると自ら移動することはできません。そのため、多くの動物のように配偶者を選択することはしません。しかし、繁殖期になると複数の種が同調して精子と卵を「バンドル」と呼ばれる塊として海中に放出する「放卵放精型」の有性生殖を行います。

放出された卵は海中を漂いながら、種特異的に精子を引き寄せ、活性化させる物質を分泌すると考えられており、その

結果として同種の精子が卵に誘引され、受精が成立します。このような海中での受精過程は非常に壮観であると同時に、サンゴが世代をつなぎ、個体群を維持・拡大していくうえで極めて重要な生態的特性ですが、その詳細な仕組みや環境との関係については未解明な点も多く残されています。



放出されたバンドル(赤い部分が卵)

私は奄美群島を主なフィールドとして、ミドリイシ属サンゴの繁殖生態および進化的背景の解明を目的とした研究を進めています。特に注目しているのが、産卵時に放出されるバンドルの硬さや崩れやすさといった性質の違いです。奄美大島で実施した研究から、これらの性質が種や海域によって異なることが明らかになってきました。

こうした違いは、海流や水温、波浪条件などの環境要因や遺伝的背景と関連している可能性があり、現在は野外調査と実験的手法を組み合わせることで、その関係性を検証し、繁殖戦略との関連を明らかにしようとしています。

また本研究では、研究活動を教育と結びつける取り組みとして、奄美の高校生と協力したミドリイシ属サンゴの種多様性調査も実施しています。実際に海に入り、サンゴを観察・記録する

調査を通じて、奄美の沿岸域にどのようなサンゴが分布しているのかを明らかにするとともに、地域の自然環境への理解を深める機会を提供しています。

これらの研究および教育活動を通じて、奄美のサンゴ礁生態系の理解を一層深め、将来的な保全や持続的な利用に資する知見を提供していきたいと考えています。



上段左右:多様な形を持つミドリイシ属サンゴ
下段左右:サンゴ礁の周辺には多くの魚が集まる

研究紹介③

哺乳類の和名の移り変わり:ケナガネズミの例

菊池 隼人
(島嶼研奄美分室)

「和名」とは、ある生物の日本での呼び名であり、国際命名規約に従うものではないものの、ある程度学問的に整理された呼称のことを指します。そのため学問の進展に伴い、生物の和名もまた変わることがあります。

奄美大島、徳之島そして沖縄島に生息するケナガネズミもその1種で、発見(記載)されたのちに国際的な分類体系が整理される過程で、学名および和名が変わっていきました。

学名の移り変わりについてまとめた文献は既にいくつかあるのに対して、和名の移り変わりについてまとめたものは、私の調べた限りありません。そこで、お粗末ながら調べてみることにしました。この内容は令和7年10月28日に行われた、奄美倫理法人1850回モーニングセミナーでの講演内容をまとめたものです。

記載以前の和名

ケナガネズミが記された最も古い文献は、薩摩藩士である名越左源太が書いた「南島雑話」(名越 1855)です。ここには「木鼠(リモ)」という動物のことが記されていて、ケナガネズミの特徴と合致する「尾白く、倭の鼠の如

し」という記述があることから、リモはケナガネズミの事だと考えられています。

記載以降の和名の移り変わり

その後ケナガネズミは、1906年にThomasによって、奄美大島産の個体が新種 *Lenothrix legata* として記載され、学問の世界に登場しました(Thomas 1906)。

和名が初めて提唱されたのは本種が記載されてから3年後の1909年で、浪江元吉という人が、沖縄島で採集された標本を基に「オキナワキネズミ(学名 *Mus bowersii*)」と命名しました(浪江 1909)。命名の由来は示されていませんが、本種は沖縄方言で「キネズミ」であることから(黒田 1940)これが由来と思われる。その後1913年に出版された「動物学雑誌」の中でも、本種は青木文一郎によって「オキナワキネズミ」と記されています(青木 1913)。

しかし1915年になると、青木は新しい和名「オキナハケナガネズミ」を提唱します(青木 1915)。その理由として青木は「浪江氏は *bowersii* として、キネズミなる和名を用ひらる; wood-rat の譯ならん」と思考す。今や本鼠は

Epimys 以外のものに同定せられ、同時にリスを一名キネズミと稱ずるを以って、余は新しき和名を附するを妥當と信じ、其特徴より、オキナワケナガネズミと命名せり」と述べています。つまり、キネズミという名前はリスの別名でもあることからふさわしくない。ならば長い毛が生えている特徴からケナガという名前をつけよう、と考えたようです。

しかし、このままケナガネズミと呼ばれるようになったわけではありませんでした。1924年に出版された「哺乳動物図解」（岸田 1924）において、本種はオキナワネズミという名前が出てきます。文献中には一名として、オキナワキネズミ、オキナワケナガネズミの名前が、命名者と共に記されているのですが、それにも関わらず著者である岸田久吉が和名を改めた理由を、文献中に見つけることはできませんでした。これに際してどのような議論があったのかは分かりませんが、オキナワケナガネズミと命名した青木文一郎も、1930年にはオキナワネズミという和名を用いています（青木 1930）。

和名「ケナガネズミ」の定着

このように和名は二転三転しましたが、1938年に黒田長禮によって現在の「ケナガネズミ」という名前と呼ばれるようになりました（黒田 1938）。その2年後に出版された「原色日本哺乳類図説」という図鑑（黒田 1940）においてもケナガネズミの和名が用いられ、

そのまま現在に至っているようです。なお黒田（1940）には、これまでに出てきた和名が列挙されています。そのため黒田はこれらを踏まえたうえで「ケナガネズミ」と名付けたと思われるのですが、岸田のときと同じく理由はわかりませんでした。この時代の哺乳類学者に何があったのか、互いのことをどのように思っていたのかを伺い知るためには、さらにたくさんの資料を読む必要があるようです。

引用文献

- 名越佐源太. 1855. 南島雑話.
 Thomas O. 1906. On a second species from Liu Kiu Islands. The Annals and Magazine of Natural History, Series 7 17: 88-89.
 浪江元吉. 1909. 沖縄及奄美大島の小獣類に就いて. 動物学雑誌 21: 452-457.
 青木文一郎. 1913. 本邦における哺乳動物の分布. 動物学雑誌 25: 498-517.
 青木文一郎. 1915. 日本産鼠科 増訂. 日本動物学会. 88pp.
 岸田久吉. 1924. 哺乳動物図解. 農商務省農務局, 240pp.
 青木文一郎. 1930. 哺乳動物より観たる台湾島と其周囲. 地学雑誌 42: 501-509.
 黒田長禮 1938. 日本産哺乳類目録. ヘラルド社, 122pp.
 黒田長禮. 1940. 原色日本哺乳類図説. 三省堂. 322pp.

奄美分室の活動報告（2025年10月～2026年3月）

<シンポジウム>

◎令和7年度鹿児島大学シンポジウム

「奄美群島における『生物文化多様性』と『地方創生』」

日時：2026年2月14日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学ミッション実現戦略分プロジェクト「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」（国際島嶼教育研究センター・理工学研究科 DX コネクトセンター）

後援：奄美市

<セミナー>

◎第55回奄美分室で語りましょう

「送電網を外し、島で生きる—Off the Grid. On the Island—」

日時：2025年12月5日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

講師：酒井 一徳（株式会社酒井建築事務所）

◎第56回奄美分室で語りましょう

「14の集落（シマ）が主役！宇検村里海づくり事業」

日時：2025年12月16日（火）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

講師：中野 恵（一般社団法人浦々シマジマ実践ラボ）

◎第57回奄美分室で語りましょう

「ヒトデの不思議と奄美群島の水産業を取り巻く現状」

日時：2026年2月27日（金）ハイブリッド開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

講師：寺岡 勇泰（鹿児島県大島支庁林務水産課）

◎第58回奄美分室で語りましょう

「奄美ならではの生物研究を一步先へ進めたい」

日時：2026年3月13日（金）対面のみ開催

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

講師：菊池 隼人（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）



講演する寺岡勇泰氏



講演する菊池隼人氏

< 観察会 >

◎宇検村田検における植物観察会

日時：2025年9月20日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：鈴木 英治（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

四級親水公園の駐車場に車を停めて湯湾岳方面に向かう林道に沿って、2 kmあまりを歩いて往復しました。天気が良くて暑かったですが、林道沿いは木陰になっている部分が多く比較的涼しく歩くことができました。

17名の参加者があり、ゴンズイやシマサルナシの実など様々な植物をみることができました。



林道を歩きながらの植物観察



ゴンズイの実

◎奄美大島大浜海岸における海の生きもの観察会

日時：2025年9月20日（土）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

共催：奄美海洋展示館

講師：北之坊 誠也（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）、小瀬村 岳（奄美海洋展示館）、佐々木 渉太（奄美海洋展示館）

協力：大島高校珊瑚研究チーム

奄美大島大浜海岸で「海の生きもの観察会」が行われました。11名の参加者と共に、海中の多様な生物の姿と生息環境を直に見て学びました。



海中で生きものを採集する参加者と、講師の北之坊研究員(中央)

◎役勝川沿い八津野周辺の植物観察会

日時：2025年2月15日（日）

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

講師：鈴木 英治、菊池 隼人（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

奄美大島の役勝川周辺で植物観察会を行いました。老若男女を含む24名が参加して、大変盛況となりました。講師の鈴木英治特任教授の解説に耳を傾けながら、各々が興味のある植物を見つけ、語り合いながら道路沿いを歩きました。



植物を見ながら役勝川沿いを歩く参加者

< 奄美分室で協力したイベント >**◎第 1850 回 奄美倫理法人会セミナー「奄美の哺乳類 発見と命名の歴史」**

日時：2025 年 10 月 28 日（火）

菊池 隼人特任研究員が講師として参加

◎第 12 回 東アジア島嶼海洋文化フォーラム

日時：2025 年 11 月 13 日～15 日（火）

奄美分室常駐スタッフが運営、演者として参加

◎大島地区理科教育研究協議会主催「科学の祭典」

日時：2025 年 12 月 20 日（土）

奄美分室常駐スタッフが研究紹介、観察体験を実施

< 奄美分室来訪者数 >

のべ 685 名（2025 年 9 月 1 日～2026 年 2 月 28 日）

< 奄美分室関連報道記事（2025 年 9 月～2026 年 2 月） >

| | | |
|------------|-----------|---------------------|
| 2025/9/23 | 南海日日新聞 P8 | 「サンゴ礁の多様な生き物学ぶ」 |
| 2025/10/1 | 奄美新聞 P6 | 「うがみんしょうらん！島嶼研奄美分室」 |
| 2025/10/6 | 奄美新聞 P9 | 「戦争遺跡の活用探る」 |
| 2025/10/6 | 南海日日新聞 P1 | 「戦跡の保存と継承を考える」 |
| 2025/11/20 | 南海日日新聞 P3 | 「国際会議で奄美を紹介」 |
| 2025/12/8 | 南海日日新聞 P7 | 「世界自然遺産登録から 4 年」 |
| 2026/2/15 | 奄美新聞 P9 | 「奄美群島をスタートアップの拠点に」 |
| 2026/2/16 | 南海日日新聞 P1 | 「奄美拠点に世界へ」 |



奄美分室メンバー(令和7年 8 月～令和8年 3 月)

～学生島体験！ vol.22～ モニタリング調査と奄美の食

吉田 早希（鹿児島大学農学部農林環境科学科 4年）

私が奄美大島を訪れたのは、2025年1月と、11月の二度である。飛行機の着陸が近づき、窓の外をのぞくと、眼下に広がる透き通った青い海が、私を出迎えてくれた。滑走路は海のすぐそばにあったので、このまま海に着水してしまうのではないかと思うほどだった。

どちらの訪問も奄美モニタリング調査のために、森の中を歩き回る日々だった。幸いにも二度ともハブに遭遇することはなかったが、調査は決して楽ではない。日が暮れてから暗闇の中斜面を滑り下りたり、沢を登る途中で長靴の中に水が入り込んできたりと、体力的にも精神的にも厳しい場面が多かった。

それでも調査を頑張れたのは、奄美の美味しい食事があったからだ。朝目が覚めると、朝食と昼食に何を買うかを考えることから1日が始まる。ファミマのパンコーナーやグリーンストア、島人マートなど、奄美にしかないようなお店での買い物は大変心が躍った。日中、森の中を歩いている間も「今夜はどこで何を食べるのかな」と思いを巡らせる。調査で疲弊した後の食事はより美味しく感じた。奄美の食事は、過酷な調査を乗り越えるための原動力であり、今となっては調査の辛さよりもご飯の美味しさの方が、思い出の大半を占めている。次に奄美へ訪れる時には、どんな食事に巡り合えるか今から楽しみだ。



編集後記

今号も無事に発行することができました。奄美では桜も既に散り、スダジイの新芽の緑が春を感じさせます。来年度は分室の様子が大きく変わりそうなので、次号では移り変わる分室の様子を紹介できたらと思います。

表紙の早口言葉は、島立岩から港を見下ろした時に閃いて作りました。読み方は

「こみなとの みなとのなみは こなみのみ
みなみのなみも みなもむのみ」です。

(菊池 隼人)

Facebook Instagram X(Twitter)



島嶼研分室だより No. 22

令和8年3月15日発行

鹿児島大学

国際島嶼教育研究センター奄美分室

〒894-0026

鹿児島県奄美市名瀬港町15-1 奄美群島大島

袖会館6階

TEL: 0997-69-4852 FAX: 0997-69-4853

E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp

<http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/>

表紙写真：

島立岩から見えた小湊港（奄美市）

（撮影：菊池 隼人、2026年1月）

ISSN: 2189-793X